

<今日の説教のポイント ルカによる福音書8章19～21節>

### 1 異教徒の国に生まれて生きている私たちには特に気になる箇所。

今日の箇所は、この異教の国日本でキリスト者になろうとする多くの人にとって気になる、またそれ故に、そこから何をどの様に聞き取ることが大事な箇所だと思います。別の言い方をすれば、入信を反対する親兄弟の思いを断ち切って信仰者となれるかと問いかけ、そうしていい理由が示されている箇所だと思います。

### 2 家族の思いも理解できる。しかしイエス様が示された姿は？

この箇所はまずイエス様御自身が肉親の無理解に直面されたことを示しています。一番古いマルコ福音書には、イエス様の身内の人々が主を取り押さえに来たと記されています(3:21)。それをけしからん行為だだけ決めつけることはできないと思います。家族のイエス様に対する心配の思いもあったのだと思います。では、家族が心配してくれるその思いを受けとめて主は宣教活動をやめられたのでしょうか。それはあり得ませんね。福音の宣べ伝えは父なる神様から託された行為であったからです。家族はそのことがまだ分からなかったのです。しかし後に、彼らもそのことに目が開かれ、初代教会の大事なメンバーになったのです。

### 3 聞くべきは何か？ 信仰はそれが問われ、そこに道が開かれるもの。

以上のことを考えると、まだ主イエスがどの様なお方であるかを理解していない肉親の情にほだされてキリストを見捨てることはあり得ないのです。主の言葉、「わたしの母、わたしの兄弟とは、**神の言葉を聞いて行う人たちのことである**」(21)は、肉親に対して冷たい言葉と取るべきではなく、新しい神様の家族(エフェソ 2:19)という恵みの広がりを示す言葉と捉えるべきです(福音的理解)。ルカが一番伝えたいことは「**神の言葉を聞いて行う**」ことの大事さです。私が献身すると伝えた時、父は涙して反対しました。しかしなぜかその瞬間、「これは一時の涙。いずれ喜びに変わる」と思ったのです。神学校を出て教会に赴任して数年後、父は洗礼を受け教会に喜んで仕えてくれる人となりました。御言葉を信じて歩むことが神様の用意して下さった恵みの道なのです。